「セロ弾きのはなし」から「セロ弾きのゴーシュ」へ(1)：「セロ弾きのはなし」の成立

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉浦, 静 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7024

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻国文　第52号　二〇二一年三月

「セロ弾きのはなし」から「セロ弾きのゴーシュ」へ（1）

――「セロ弾きのはなし」の成立――

杉浦　静

0　はじめに

「セロ弾きのはなし」は、『校本宮澤賢治全集』第10巻（1974年3月）の「セロ弾きのゴーシュ」校異において、はじめて「セロ弾きのゴーシュ」草稿の中に埋もれたテクストとして紹介され、「セロ弾きのゴーシュ」の先駆稿として位置づけられた。しかし、この全集において本文化あるいは準本文化されなかったこともあり、その後のゴーシュ関連論考においてもほとんど論じられることなく現在に至っている。[1]「セロ弾きのはなし」のテクストについては、入沢康夫が『校本宮沢賢治全集　資料第四（原色複製セロ弾きのゴーシュ）』の「解説　セロ弾きのゴーシュ　草稿全三十二葉」（1983年10月、筑摩書房）において、その一部を復元紹介している。しかし、解説という性格上、テクストの解釈に踏み込むことには禁欲的であった。ゴーシュ論の中では、早くに萬田務「「セロ弾きのゴーシュ」攷」（『作品論宮沢賢治』1984年7月、双文社出版）が、「セロ弾きのはなし」を先駆稿と位置づけ、大正十年後半から同十三年十二月以前の時期に書かれたと推定するが、「セロ弾きのはなし」そのものの「作品分析」はなされていなかった。

また、松岡由紀「「銀河鉄道の夜」と「セロ弾きのゴーシュ」―晩年の賢治童話と音楽―」（東京女子大学「日本文学」68号、１９８７年９月）は、

この作品も数年に及ぶ推敲によって大きく変化した結果、現在の形となっている。用紙や筆記具の違いから、現存草稿の最も古い部分は〈ねずみ〉の話であり、次が〈猫〉、その次が〈かっこう〉という順で書かれ、〈狸〉の話が付け加えられた後、序と結末が書かれたということが明らかになっている。もちろん推敲によってそれぞれの話の内容には最終形までに多少の変化がみられ、話の順序も〈かっこう〉が書き出された時点では、「一、（不明）」「二、猫」「三、ねずみ」「四、かっこう」であったらしい。主人公のゴーシュという名はまだなく、ただ「セロ弾き」とだけ書かれ、題名も「セロ弾きのはなし」となっていたこの童話は、毎晩違う動物がセロ弾きを訪れ、音楽についてのやりとりがある。そして動物は去り、セロ弾きは寝て「おまへさんもおやすみ」という言葉で締めくくられる、というパターンのくり返しで構成されていた。このオムニバス形式に構成された「セロ弾きのはなし」が「セロ弾きのゴーシュ」最終形のような一貫した物語へと整えられる時、賢治がその構成を思案した跡がメモとして残っている。

と言及するが、「セロ弾きのはなし」のスタイルや構成につき興味深い指摘があるものの、「セロ弾きのはなし」の解釈や「セロ弾きのゴーシュ」への改作の具体的な分析には及んでいない。

本稿は、「セロ弾きのはなし」について論ずるとともに、「セロ弾きのゴーシュ」への改稿の意味をも考察するものである。

１　成立過程について

「セロ弾きのはなし」は、「セロ弾きのゴーシュ」草稿中に埋もれた童話である。

「セロ弾きのゴーシュ」は賢治最晩年に成立した童話とされているが、「数次にわたる部分的書き直しや順序の組み変え・新稿追加などを経て成立している」（『新校本宮沢賢治全集』第十一巻校異篇）と説明されるように、複雑な生成過程を経ているため実は相当の時間をかけて書き継がれて成立したと推測される。

なお、以下では『新校本宮沢賢治全集』を新校本全集と括弧ナシで略記することにする。

現在残されている「セロ弾きのゴーシュ」の草稿は、32枚。そのほかに、新校本全集では「断片稿」として扱われている1枚が残されている。この「断片稿」は、「用字や字体から見て、本作品の生成過程の一段階において書かれ、それがのちに不要となったものと考えられる。」（新校本全集校異）とされるように、生成過程のなかで一度は書かれたものの、次の段階で不要となった1枚である。この1枚は、用紙左半分に作品題名列挙メモが書かれたために廃棄されずに残されたものである。[2]

これらの「断片稿」を含む草稿33葉は、ほとんどが数段階の推敲を経た草稿であり、まとめて清書されたものではない。そのため、これらの草稿では、最終形態（最後の手入れ）の下に、それ以前の段階の稿が積み重なっている。各草稿では、異なった筆記具を用いて推敲が施されているが、これは、数次の段階の推敲を、その都度紛れないようにするためであったとみられる。

新校本全集「校異」によれば、「セロ弾きのゴーシュ」草稿における筆記具の使用順序はおおむね次の5段階になる。[3]

①段階　赤インク・太めのペン
②段階　黒インク・細めのペン
③段階　鉛筆・「やや太めの速書き」
④段階　朱色がかった赤インク（朱インクと略記する）・ペン
⑤段階　ブルーブラックインク・やや細めのペン

他に、やや濃いブルーブラックインク・ペン、墨・毛筆

これらの、筆記具（第一形態を書くのに使用した筆記具）と、そこに用いられている用紙の種類もほぼ対応している。例えば、①の段階で、赤インク・太めのペンで第一形態が書かれているテキストは、すべて「藁半紙」に書かれているし、③の段階で、第一形態が鉛筆で早書きされたテキストは、すべて「1020（広）イーグル印原稿紙」（藍色罫）に書かれている。

現存する草稿を確認すると①から③までのそれぞれの段階の、同一筆記具を用いて、同一紙葉に書かれているテキストの第一形態は、それぞれが一つのエピソードをなしている。

①は、親子ねずみのエピソード、②は、三毛猫のエピソード、③は、かっこうのエピソードである。[4] そして、これらの三エピソードは、「セロ弾きのはなし」の各パートをなしていたと考えられる。

④は、セロ弾きの紹介の役割を持つ冒頭部となっている。

⑤は、「セロ弾きのゴーシュ」冒頭部の活動写真館での練習の場面、及び末尾の演奏会の場面、さらに第三夜の狸の子どもとの合奏の場面の全部の第一形態記入に用いられている。また、猫・かっこう・ねずみのエピソードの推敲手入れに用いられ、最終形態を成立させている。

ここから、「セロ弾きのゴーシュ」は、⑤のブルーブラックインクで、冒頭・末尾及び狸の場面を書き下ろし、さらに、それまでに書かれていた三つのエピソード（猫・かっこう・ねずみ）を整えて、組み込むことによって成立したということがいえるのである。

そして、さらに、①から③には、先に述べたような⑤のブルーブラックインクによる手入れ以前に、①の第一形態には、②の黒インク及び④の朱インクによる推敲手入れが行われ、②の第一形態には、③の鉛筆による推敲手入れが行われている。③・④にはブルーブラックインク以前の手入れはない。

以上を綜合すると、以下のような、「セロ弾きのゴーシュ」への成立過程を想定することができる。

1　「セロ弾きのはなし」のエピソードの成立（と各パートとしての組み込み）

①親子ねずみのエピソード（赤インク）＋黒インク・朱インク手入れ

②三毛猫のエピソード（黒インク）＋鉛筆手入れ

③かっこうのエピソード（鉛筆）

2　④「セロ弾きのはなし」冒頭部（序章）の成立（朱インク）

セロ弾きへの命名（ゴーシュ）、親子ねずみのエピソードへの途中で手入れ中止

3　「セロ弾きのゴーシュ」への構想組み変え（構想メモ・ブルーブラックインク）

4　「セロ弾きのゴーシュ」の成立（ブルーブラックインク）（以下の①～③の順番は成立順ではない）

①活動写真館・演奏会のエピソード

②狸の子のエピソード

③「セロ弾きのはなし」の各エピソードの手入れと組み込み

2　「セロ弾きのはなし」の成立

1　ねずみのエピソード

①段階の最古層に埋もれているのは、「セロ弾きのゴーシュ」の親子ねずみのエピソードの原形である。現存第24葉（藁半紙）および第27葉から第29葉右半分までに赤インク・太めのペンで書かれている。この直前の第23葉および、中間部の25・26葉は、ブルーブラックインク・やや細めのペン（第⑤段階）のみで書かれ、

書きながら以外の推敲・手入れはない。それに対して、第24及び27～29葉（藁半紙）については、②・③・④・⑤段階の筆記具を用いた手入れが行われている。このエピソードが「セロ弾きのはなし」の中の一つとして書かれたことはこのことからも明らかである。

現存第24葉の冒頭は、「まるでけしごむのくらゐしかないのでセロ弾きはおもはずわらった。」となっている。これ以前の部分が書かれていたことは明らかだろうが、残念ながら現存しない。直前の第23葉末尾は、「そのまた野ねずみのこどもと来たら」であるから、矛盾なく接続するのだが、23葉は「「ました」調」で書かれており、また、筆記具も前述通りブルーブラックインクであるので、23葉が⑤段階での追加稿であることは明らかである。

また、第24葉の左半分末尾は破損しているが、これは、第一形態（赤インク）に対するブルーブラックインクによる手入れの後で、不要部分が著者自身によって破棄されたものと考えられる。

第24葉の第一形態の末尾は、「だって先生」。第27葉の第一形態の冒頭は、「床にひゞくとおまへたちの病気がなほるといふのか。」であるので、この間も、おそらく24葉左半分末尾の破棄時にいっしょに廃棄されたと推定される。

第29葉の第一形態（赤インク）記入時の末尾は、「「なんだ。ばかにしてるなあ。」／そこでセロ弾きはねた。おまへさんもおやすみ。」と、このエピソードの末尾をなすものとなっている。

ねずみのエピソードは、冒頭・中間部を欠きながらも一応末尾まで存在するということである。

このエピソードは、次のようなものである。

野ねずみの「お母さん」は、子ねずみの病気を治してもらいにセロ弾きのところへやって来る。母ねずみは、「青い栗の実を一つぶ[4]」おいて、「ちゃんとおじぎをして」セロ弾きに頼む。

「どうか先生、この児があんばいが悪くて死にさうでございますが、先生にどうかあんまをとっていたゞけないでございませうか。」

セロ弾きは、「あんまは知らない」と「すこし怒って」いうので、母ねずみは、セロ弾きは、毎日みんなの病気を治していると訴える。それでも、セロ弾きは、「何のことだかわからんね」と拒絶する。（この間、草稿は失われているが、セロの音が床に響くことでそれがあんまになって、みんなの病気が治ってると説得があった模様である。）

そこで、セロ弾きは結局「よしわかったよ。やってやらう」と引き受ける。「セロ弾きはすぐセロを戸棚から出してギウギウゴウゴウと糸を合せて」からはじめる。セロ弾きは、すでにセロを片付けていたのである。それもセロ弾きの不機嫌の原因であったかも知れない。ちなみに、ブルーブラックインクによる「ゴーシュ」への改作では、この晩ゴーシュは、練習に疲れて「楽器をもったままうとうとして」いたところに鼠が尋ねてくるように変えられている。その後セロ弾きは、いきなり「ねづみのこども」を「セロの孔」から中へ入れてしまう。心配する母ねずみを前にして「何とかラプソディとかいふものをごうごうがあがあ弾」くと、これが効いて、セロの孔から出たこどものねずみは、「ぶるぶるぶるぶるふるえてゐたがにはかに起きあがって走りだした。」。

それに喜んだ母ねずみは、セロ弾きにお礼を言って、こどもといっしょに走っていたが、「たうたうせわしくおじぎして出て行って」しまうのであった。

セロ弾きは、「なんだばかにしてるなあ。」と言って寝る。そこで語り手は、「おまへさんもおやすみ」と、聞き手を寝かしつける。

このエピソードには、注目しておきたい点がいくつかある。まず、最初は、セロ弾きは、ねずみの親子が訪れたとき、すでにセロを戸棚にかたづけていたと言う点である。セロ弾きが毎日「ごうごうがあがあ」セロを引いていることは、母ねずみの「先生は毎日あんなに上手にみんなの病気をなほしておいでになります。」から明らかだが、それが、どれくらいの時間かは、不明である。ゴーシュのような毎晩帰宅後の猛練習ではなく、日々の練習程度である可能性が高い。

次いで、最後に親子が「せわしくおじぎして」そそくさと帰って行ったのに対しての「なんだばかにしてるなあ。」と

いう反応である。ねずみは、確かに子ねずみの病気の治療という目的を持ってセロ弾きを訪れ、治癒後には、お礼を述べながらもそそくさと帰ってしまったように見える。しかし、ねずみは最初訪れたときにセロ弾きの前に「青い栗の実を一つぶ」おいてお願いしているし、また、帰る際も「ありがたうございます」を二度くり返し、「せわしく」ではあるが、「おじぎ」している。十分にセロ弾きへの礼は尽くしていると見える。それなのに、セロ弾きが「ばかにしてる」と感じるのは、何故なのか。語り手はこれ以上を語らないので、推測するほかはない。最初に母ねずみが、セロ弾きに「あんま」をとってくれるように頼んだ時に、セロ弾きは、「おれはあんまは知らないよ」と「少し怒って」いる。この言葉は、次の段階の推敲で、「おれが医者などやれるかい」と直されている。これは、セロ弾きが、自分の本業である音楽そのものを評価するのではなく、その余技とも言うべきあんま（振動）を求められていることに対する怒りと言ってもいいだろう。そして、直してやった結果、そそくさと帰ってしまったように感じている。自分の本当のものではないところを勝手に利用され、しかも厚いお礼もなかったというのが、「ばかにしてるなあ」という反応の真意なのではないか。すなわち、ここでねずみの利己的な目的に奉仕させられたという感覚が、この言葉を呼び起こしたとも考える事ができるのである。

最後にもう一点、このエピソードが、「おまへさんもおやすみ」という語りで終わっていることである。明らかに、ここでこのエピソードを聞いている「おまへさん」が設定されている。語りのスタイルとしては、多数の聴衆に「ある牛飼い」が語る「オツベルと象」に共通するものがあるという事にも注目しておこう。

2　猫のエピソード

②段階の層に埋もれているのは、「セロ弾きのゴーシュ」の猫のエピソードの原形である。

現存第5葉（藁半紙）、および第7葉から第10葉（藁半紙）までに黒インク・細めのペンで書かれている。

第5葉と第7葉は、もと1枚の藁半紙であったものを、⑤段階のブルーブラックインクによる推敲の際に、「ちぎって

二枚にし」たものである。第6葉は、その中間に挿入されたものであり、別の筆記具、用紙に書かれている。従って、第5＋7葉から第10葉までの紙葉に黒インク・細ペンで書かれたテクストの第一形態が、猫のエピソードである。現存第5葉（藁半紙）の右端には、黒インクで「セロ弾きのはなし　二、」と書かれている。この一行は、上端から約五文字分下げて、字間もややゆったりと書かれたもので、明らかに章題を意識して書かれたものである。そして一行空けて、エピソードの本文が始まる。「二、」は、次のように始まっている。

セロ弾きは次の晩もまた遅くくたびれて帰って来ました。そしておうちへはいってあかりをつけるとすぐとんとんと扉をたたくものがありました。

「またかい。もう今夜はやだよ。」

ところがはいって来たのはいままで五六ぺん見たことのある大きな三毛猫でした。

セロ弾きは毎晩「遅くくたびれて」帰ってくる生活をしている。しかし、どこでどのようにセロを弾いているかはまだ不明である。

また、「またかい、もう今夜はやだよ」というセロ弾きの反応からは、前夜にも訪れるものがあったこと、疲れたセロ弾きに負担になることを頼んでいたことが明らかになる。

そして、入って来た三毛猫が、「ところが」とされていることから、前夜訪れてきたのが三毛猫以外であったことも明らかになる。

今失われている〔セロ弾きのはなし　一、〕も、また、夜に何等かの動物が訪れてセロ弾きに何かを頼むような話であったのである。ここから、この「セロ弾きのはなし　二、」が書かれた時点では、後の「セロ弾きのゴーシュ」のように、楽団の練習の場面からはじまる話ではなかったと言うことが明らかになるだろう。

さて、三毛猫は、前夜の訪問者と同じように扉をノックして入って来た。半熟の青いトマトを「運搬」しながらである。

この姿を見たセロ弾きは「行ってしまへ。ねこめ」と烈しく怒る。しかし猫は、「シューベルトのアヴェマリア」を弾くといい気持ちになる、「わたしはどうも先生の音楽をきかないとねむられないんです。」という。これに対して、セロ弾きはますます「生意気だ」と怒るが、「にはかに気を変へて」猫のリクエストに応えるそぶりをして、扉にカギをかけ窓も閉めてしまう。そして、「譜のいちばんしまひから逆に前の方へ」弾いていくと、猫の毛皮から、ひげから鼻から火花が出て、「はせまは」ったり、「はせあるいたりして」苦しむことになった。セロ弾きは、猫が激しく動いて苦しむのが「面白くなって」ますます猫を苦しめる。ようやくやめると、猫はけろりとして、批評めいたことを口にしたので、セロ弾きは、また「ぐっとしゃくにさはり」、猫の舌でマッチを擦るという荒々しい仕打ちをする。猫は何度も扉にぶっつかるがでられず、セロ弾きに扉をあけてもらって、「風のやうに」走り去った。それを見てセロ弾きは「ちょっとわらひながらねました」。最後に語り手が、「ではおまへさんもおやすみ。」と語って猫のエピソードは終わる。

生意気な猫に対して怒り、猫をこらしめるうちに、セロ弾きは、嗜虐的な楽しさを感じるようになり、その結果「くたびれて帰ってきた」セロ弾きの気分が晴れるという話になっている。

これ以前の①段階のねずみのエピソードでは、子ねずみの病気を治してもらいたいという明確な目的があって、セロ弾きを訪れていた。では、この三毛猫は、何をしにセロ弾きのところに来たのだろうか。セロ弾きは、三毛猫に対して、最初は「怒り」、次いで「生意気だ」と感じ、「ぐっとしゃくにさわ」った後にも「生意気だ」を三度くり返して「足ぶみしてどなる」といった激しい怒りを感じている。最初の「怒り」は、猫が未熟なトマトを勝手にもいで、土産代わりに「運搬」してきたことへのものである。次に、「生意気だ」と感じているのは、「シューベルトのアヴェマリアを引いてご覧なさい。いい気持ちになりますから。」と上から目線でのリクエストに対してである。このリクエストへの「生意気なことを云ふな。どうしてやらうかな。このねこめ。」という反応は、次の鉛筆による推敲で、「生意気なことを云ふな。ねこのくせに。」と変えられる。この手入れに見られるように、この時セロ弾きは、猫を自分より下位の動物とみて、それが

「ごらんなさい」などと命じるようにすることに対して怒っているのである。もう一回くり返される「生意気だ」との怒りも、同様に「先生の音楽をきかないとねむられないんですよ」という言に対してのもの。これは、自分の音楽が子守歌代わりに使われること、それも猫ごときにというというところから発した怒りであると考えられる。このような三毛猫の言説が、セロ弾きの怒りを引き出してしまったのだが、この時の猫の言動は、一貫している。まだ半熟の、しかもセロ弾きのものであるトマトは、ねずみのエピソードにおいて、母ねずみが訪ねてきてすぐにセロ弾きの前に置いた一つぶの「栗の実」と同じく、お礼の意味ではないかと考えられる。ねずみのエピソードの、「栗の実」は、猫のエピソードを記した後の同じ黒インクによって「青い栗の実」と手入れがなされている。これによって、鼠のエピソードでも、猫のエピソードも、同じ青い（未熟の）果実に統一される。つまり、同じ機能を持たせたという事になるのである。そして、このようにあらかじめお礼の品を差し出した後に、「シューベルトのアヴェマリアを引いてご覧なさい。」や「先生の音楽をきかないとねむられないんですよ」などというのであるから、やはり、言い方に問題はあるが、セロ弾きの音楽をききたかった、聞きに来たと、見てよいだろう。

とすると、このエピソードは、三毛猫の増長した態度が災いしてセロ弾きを怒らせてしまい、いじめられ追い返されてしまう話という事になるだろう。

この猫のエピソードも、最終部に、「おまへさんもおやすみ」という語りかけがある。最古層にあった、ねずみのエピソードと同じく、このエピソードを聞いている「おまへさん」が設定されているのである。

3　かっこうのエピソード

③段階の層に埋もれているのは、「セロ弾きのゴーシュ」のかっこうのエピソードの原形である。

現存第11葉から第14葉までに鉛筆で「やや大きめの早書き」されたテクストがそれである。ここに用いられているのは、

「青木大学士の野宿」草稿（「10 20（広）イーグル印原稿紙」（藍色罫））の裏である。また、新校本全集で「断片稿」と呼ばれている一葉は、かっこうのエピソードの末尾であったと推測されている。それは、用紙が、同じ「青木大学士の野宿」草稿（「10-20イーグル印原稿用紙」（草色罫））の裏を用いていること、字体や筆勢も11葉から14葉のものと非常に近いことを根拠にしてのものである。さらに付け加えるなら、このエピソード末尾の一文「ではあなたもおやすみなさい。」のスタイルの、ねずみ・三毛猫のエピソードとの共通性をあげることもできるだろう。

なお、現存第14葉の第一形態の末尾は「ガラス窓へまっすぐに飛んで」であり、断片稿の冒頭は、「から大きなパンをとり出して」である。この二文は、きちんと接続していない。この間に一葉（かそれ以上）の紙葉が書かれ、破棄されたと考えられる。

現存第11葉のかっこうのエピソードの冒頭第一行目には「四、」と書かれている。このエピソードが、「セロ弾きのはなし　四、」として書きはじめられたことがわかる。

さて、冒頭部は次のように始まる。

次の晩もセロ弾きが町から帰ってきてごぼごぼと口をすゝいで居りますと誰か屋根裏をこっこっと叩くものがあります。

「また鼠かい。今夜はだめだよ。」

セロ弾きは高く叫びました。すると天井の［〔?〕→穴］から［くぐって→削除］ぽろんと音がして一疋の［ナシ→灰いろの］鳥が降りて来ました。見るとそれはかくこうでした。

「次の晩も」と始まるのは、三毛猫のエピソードと同じスタイルである。また、「町から帰って」すぐに何かの動物が訪れてくるのも同じとみてよいだろう。

セロ弾きは、屋根裏から「こっこっ」という音が聞こえるや「また鼠かい」と叫んでいる。これは以前にも鼠が訪れて

いたことを示している。そうすると、この鉛筆による第一形態が書かれた段階では、かっこうの前には、「ねずみ」のエピソード「三、」があったということになる。そして、「ねずみ」のエピソードも、「次の晩も」とはじまり、「町から帰って」から、セロを片付けた後で、どこかを叩いて（ノックして）から入って来たのであろう。それを見て、残されているねずみのエピソードの第一形態は「まるでけしごむのくらゐしかないのでセロ弾きはおもはずわらった。」と始まっているのだと、推測される。

そうすると、この時点では、「セロ弾きのはなし」は、つぎのような構成になっていたと推定できるのである。〔　〕内は、推定。［　］内は登場する動物。

〔セロ弾きのはなし　一、〕　［不明］
　セロ弾きのはなし　二、　［猫］
〔セロ弾きのはなし　三、〕　［ねずみ］
〔セロ弾きのはなし〕四、　［かっこう］

さて、かっこうのエピソードはこの様に始まった。かっこうが、天井の穴から降りて来た時、セロ弾きは、

「鳥まで来やがった。何の用だ。」

と言う。この発言を見る限り、それまでの、三夜の動物たちの訪問は、歓迎されたものではなかったし、親和的なものでもなかったということができるだろう。セロ弾きと動物たちの交遊・交流などといえるような関係には、各夜の動物が去った後でもなっていなかったのだ。だからこそ、セロ弾きは迷惑そうな、反応をしているのである。

これに対して、かっこうは、すまして「音楽を教はりたいのです。」と目的を明らかにする。セロ弾きは、かっこうの鳴き声を単純な音の繰り返しと見て「ばかにした」ような態度をとるのだが、かっこうは、さらに微妙な違いを実際に鳴

いて見せる。なお、ここで作者は、音の違いを、「こ」を他の倍の大きさで書いた「カッ**こ**ウ」と、「か」を他の倍の大きさで書いた「**か**っコウ」によって、仮名や字の大きさの違いを用いて視覚的に鳴き声の差異を表現しようとしている。やはりセロ弾きは納得しないが、重ねて「ドレミファを正確にやりたい」と「教はりたい」ことを具体的に提示する。かっこうの熱心さにまけて、「三ぺんだけ」弾いてやることにする。セロ弾きは「ドレミファソラシド」と音階を弾いたが、かっこうの「ドレミファ」とは「かっこう」と言う鳴き声（正確な音程での鳴き声）のことであることが明らかになり、かっこうに主導されるようにして、「ドレミファ」を続けることになる。セロ弾きは、「うんと弾いてかっこうをつかれさせてやらう」とにやりと笑う。しかし、かっこうは疲れずますます一生懸命に叫んでいるので、かえってセロ弾きの方が「手が痛く」なり、やめてしまうことになる。かっこうもやむなくやめたが、セロ弾きは、「すっかり疲れておこってしまって」かっこうに帰れと命じる。そうするとかっこうは、「あゝよかった。さあドレミファができたぞ。」と満足して、さっさと帰ろうとする。この時、鉛筆による第一形態は「ばたばた飛びあがって外へ出やうとガラス窓へまっすぐに飛んで」までしか、残されていない。この次の部分は破棄されてしまっているので、この後のかっこうが第一形態でどうなっていたかはわからないが、「セロ弾きのゴーシュ」と同様の「ガラス窓」にぶっつかってなかなかでられないという場面があったのではないかと推定される。このようなかっこうが出て行くのに手間取る場面があったので、このエピソードの最後（断片稿の部分）は、ようやく食事にありついたセロ弾きが「大きなパン」を「むしゃむしゃ裂いて」たべる場面となっているのではないだろうか。そして、「てをぱたぱたと叩きながらねどこへもぐりこ」んでゆく。あたかも、何か片づいて満足したようなしぐさで眠りに入るセロ弾きの姿は、のちの「倒れるやうにして室のすみへころがって睡ってしま」うゴーシュとはずいぶん異なっている。最後は前述のように、聞き手に対して、「ではあなたもおやすみなさい。」と挨拶して終わる。

3　怒るセロ弾き

「セロ弾きのはなし」のセロ弾きはよく〈怒る〉。というよりも、これらの、ねずみ・三毛猫・かっこうに向かい合った時、何かを頼まれたとき、程度の差はあれ、まず最初には怒っているのである。そして、その後も怒りは何等かの形で持続することもあるのだ。改めて確認してみよう。

ねずみの場合、あんまを頼まれると、「おれはあんまは知らないよ。」と「セロ弾きは少し怒ってさう云った」と、「少し怒って」いる。

猫の場合は、三毛猫がトマトを運んできて、「なかなか運搬はひどいやなあ」と言うとすぐに「怒り出し」、猫にシューベルトのアヴェマリアをリクエストされると、「生意気だ」と「しゃくにさわってぶりぶりし」てしまう。さらに、セロ弾きの音楽をきかないと眠られないといわれると、また「生意気だ」（三度くり返す）と「すっかりまっ赤になって足ぶみしてどなり」つける。

そして、かっこうの場合は、セロ弾きとかっこうの対話が多く、語り手は直接にセロ弾きの感情を語らない。しかし、セロ弾き自身の発話から怒りがあふれ出ているところもある。訪れてきて屋根裏を叩くかっこうに「また鼠かい。今夜はだめだよ。」と「高く叫んだ」時はさほど怒ってはいない。しかし、この拒絶を無視して天井から降りてきた時には、「鳥まで来やがった。何の用だ。」という。この時の言葉遣いに表れるセロ弾きの感情は、怒りと言ってよいだろう。このあとも一貫して、かっこうに主導権をとられるような進行のためセロ弾きは不機嫌な対応をしている。その後かっこうを疲れさせようとしたものの、かえって自分が疲れてしまうと、セロ弾きは「すっかりつかれておこってしまって」、「こらとり、もう用が済んだらかへれ」と感情露わに言うことになる。ここでも、やはりセロ弾きは怒っている。

セロ弾きは何を怒っているのだろうか。あらためて整理してみよう。

ねずみのエピソードの中で、「おれはあんまは知らないよ」と怒った箇所は、黒インク（第一形態の次の段階の手入れ）により、「おれが医者などやれるかい」と手入れされている。おれはセロ弾き（音楽家）なのだから、あんまは知らない、また、セロ弾き（音楽家）のおれが医者などやれるかい、というように敷衍してみるとセロ弾きの発言の意味もわかりやすくなるかもしれない。ここでセロ弾きは、自分の音楽が、治療という目的に用いる事を求められていることに対して怒っている。それだけ、セロ弾きは自分のセロ弾き（音楽家）という職業に対してプライドを持っているのである。

三毛猫の場合は、猫の生意気で不遜な態度に対しての怒りが中心である。しかし、それだけではない。猫が、「シューベルトのアヴェマリアをひいてごらんなさい。いい気持ちになるから」と上から目線で言ったときに、セロ弾きは、「生意気なことを言うな」と言った後に、「どうしてやらうかな。このねこめ。」と付け加える。生意気な猫への、お仕置き・こらしめを考えているのだが、この発話は、次の鉛筆段階で「生意気なことを言うな。ねこのくせに。」と推敲される。この「ねこのくせに。」とした手入れにより、セロ弾きの猫に対する優越意識をみてとることができる。これは、猫と人間が対等ではなく、猫の方が人間より劣るものであるという意識が前提になっているのである。だからこそ、猫が人間に対して優位にあるような（上から目線の）物言いをすると、「猫のくせに」という怒りが発動することにもなるのである。

かっこうのエピソードでも、同じような関係性がうかがえる。かっこうが天井の穴から「ぼろんと」降りて来たときにセロ弾きは、「鳥まで来やがった」と反応する。「鳥まで」とは、前夜の「鼠」（鉛筆の第一形態）の来訪に重ねて、という意味なのだが、それが、「来やがった」と受けられることで、歓迎されざる動物の来訪というニュアンスが付加されることになる。これは、たとえば、この時訪れてきたのが、人間の友人である「ホーシュ」（「セロ弾きのゴーシュ」に登場）であったとすれば、このような反応ではなかったと思われる。「ゴーシュ」では、実際に訪れてきたのは、猫だったが、期待したかのように「ホーシュ君か」と呼びかけていた（ところが、実際は猫だったので、ゴーシュはおこるのだが）。

セロ弾きは、明確に猫やねずみなどの小動物と自分との間に優劣関係を見ているのであろう。だからこそ、かっこうが「ドレミファを教はりたいんです。」と来た時も、「音楽だと。おまへの歌はかくこうかくうとそれだけではないか。」と馬鹿にしたように見下げたように返答する。そして、終始謙虚なかっこうに対して、セロ弾きは、自分がその態度に対して怒った三毛猫とおなじような不遜な態度で対し続けることになる。自分より劣ったはずのかっこうが、自分より持続力があってかえって自分の方が疲れるといういわば負けたような形になると、プライドを傷つけられたように怒ってしまうのである。

4　意地悪なセロ弾き

三毛猫のエピソードでは、「生意気」な猫を懲らしめるために、楽譜をうしろから弾いて奇妙奇天烈な音を出す。それに反応して、体中から火花を出したり、ひとりでに歩き回ってしまったりする猫の苦しむ姿をみて、セロ弾きは「すっかり面白くなってしまう」。そうすると、ますます「勢いよく」曲を弾いて猫を苦しめる。また、再度「しゃくにさわる」態度をとった猫に対しても、何でもない風を装いながら猫を驚かせ苦しませるようなことを畳みかけるようにしてしまう。

かっこうのエピソードでも、かっこうが懸命になってセロの音に合わせていると、「うんと弾いてかっこうをつかれさせてやらうと思ってにやりと」笑う。このように、セロ弾きは、一生懸命のかっこうをからかうように、あるいは努力を逆手にとった意地悪なことをしようとするのである。しかし、かっこうは、それにもめげずに叫び続けるので、セロ弾きは逆に自分が疲れてしまうという自業自得に陥ることになるのだが、ここでのセロ弾きは、かなり意地の悪い行動をとっていることは疑いないだろう。

親子ねずみのエピソードは、母ねずみの頼みを聞いて子ねずみの病気を治してやる話なので、セロ弾きは、ねずみたち

のためになる行いしかしていないように見える。しかし、それでは、なぜセロ弾きが「いきなりねずみのこどもをつまんでセロの孔から中へ入れてしまった」時、母ねずみは、狂気のように激しく「わたしもいっしょについて行きます」といったのだろう。いちおう、母ねずみは、「どこの病院でも」そうだからとは言うのだが、しかし、ここには、「いきなり」大きなセロの胴の中へ入れられてしまったことに対する不安や心配があったのではないだろうか。赤インク段階のねずみのエピソードは、途中が破棄されているため、母ねずみが願った具体的な治療の方法についてはわからない。しかし、破棄された箇所の前後では、「あんま」をとってほしいともいい、また、セロ弾きも「床にひゞくとおまへたちの病気がなほるといふのか」と確かめているところから、セロの音の響きがあんまの代わりとなって、（恐らく血行をよくして）病気を治すという事だろうと推測される。なお、改作形の「セロ弾きのゴーシュ」では、動物たちはみんな床下で音を浴びて治療していたとされる。おそらくここでも、母ねずみが想定したのは、セロの音を「床にひゞかせて」治す程度のことだったはずである。それなのに、セロ弾きのしたことは、セロの胴の中に入れることだった。この親子ねずみは、「まるでけしごむのくらゐ」しかないほど小さかったのである。それをいきなり小さな孔から大きな胴の中に落としてしまった。そして、その中で「ごうごうがあがあ」と大音響を浴びることになるのだから、これらは相当な危険と母ねずみには感じられてしかるべきだろう。だからこそ、「きちがひのやうになって」セロ弾きに対して自分もいっしょに行くと訴えたのだろう。セロ弾きは、この時、子ねずみの危険には、全く無頓着で、頼まれたからいやいややると言った様子に終始している。むしろ、子ねずみの危険や母ねずみの心配を楽しんでいるかのような風情さえあるのではないか。ここにも、猫やかっこうのはなしと共通するようなセロ弾きの意地悪さのようなものがみられるのではなかろうか。「ゴーシュ」では、治った後、親子のねずみに「パン」を与える親切な優しいゴーシュの姿が追加されているので、この印象でセロ弾き像も見られがちだが、しかし、「セロ弾きのはなし」の中のセロ弾きは、決して相手のことを思いやるような優しい人物ではない、むしろ底意地の悪いところももった人物として、造型されていることを見逃してはならないだろう。

5　下手ではないセロ弾き

それでは、このセロ弾きの技量はどれほどのものであったのか。

先に見たとおり、このセロ弾きは、自分が音楽家であることに自信と優越感を持っている。これは、実際のセロ弾きの技量に見合うものだったのか、それとも、相手が猫・かっこう・ねずみといった小動物であるために技量以上の優越意識となっていたのか、をも確かめておこう。

「セロ弾きのゴーシュ」では、冒頭部で語り手は、はっきりと「仲間の楽手のなかではいちばん下手でした」と語っている。この「下手」さが、物語を動かして行くことになっている。しかし、「セロ弾きのはなし」では、語り手は、セロ弾きの技量・実力について直接に言及していない。このセロ弾きが「上手」とも「下手」とも言っていないのである。実際はどうなのか、はなしのなかの実際の演奏から考えて見よう。

猫のエピソードで、セロ弾きは、猫から「アヴェマリア、シューベルト」のリクエストを受け、「さうか。ではやるよ。」と言って、「譜のいちばんしまひから逆に前の方へ」弾きはじめている。ここは、黒インクの第一形態では、まず「セロ弾きは弾きはじめましたが、それはじつにへんな曲をはじめました。それは、譜のいちばんしまひから逆に……」と書き、同じ筆記具で、「へんな曲」の一節を削除して、「セロ弾きは、譜のいちばんしまひから逆に……」と手入れしている。この推敲は、「へんな曲」と、逆弾きしている曲との曖昧さを避けるための手入れであろう。この手入れにより、セロ弾きが、シューベルトのアヴェマリアを、「譜のいちばんしまひから逆に前の方へ」弾いていることが明確になるのである。シューベルトのアヴェマリアは、有名な曲だから、普通のセロ弾きはすぐにも弾くことができるだろうが、この曲の末尾から逆に前の方へ、おそらく初見で弾くというのは、相当な技術が必要なのではないか。そう簡単なことではないと考え

られる。ちなみに、「下手な」ゴーシュは、楽長に「あんな曲」といわれる「印度の虎狩り」を譜面通りに弾いている。

かっこうのエピソードでは、ドレミファを教わりたいと言ってきたかっこうが、第一形態では、「あゝよかった。さあ、ドレミファができたぞ。」と言いながら帰って行こうとする。これへの手入れでは、帰れと言われたので慌てて帰ろうとするように改められ、成果には触れられなくなる。この段階では、かっこうの求めるドレミファの音程を正確に教えていた、と見てよいのではないだろうか。ちなみに、「下手な」ゴーシュは、「できたぞ」ではなく、かっこうに「あなたのはいゝやうだけれどもすこしちがふんです。」と言われてしまう。

ねずみのエピソードでは、ねずみの母親に、セロの「あんま」で子ねずみの病気を治して欲しいと言われる。断っていたが「床にひゞくとおまへたちの病気がなほるといふのか。よしわかったやってやらう」といってセロをひくことになる。セロのF字孔から胴の中に入れて「何とかラプソディとかいふものをごうごうがあがあ」弾くと、子ねずみは、この響きに共振したのだろうか、セロの外に出されてからも「ぶるぶるぶるぶる」ふるえていた。しかし、「にはかに」治って起きあがって走りだす。まさに、セロ弾きのセロの響きによって治療されたわけだ。母ねずみの言によれば、セロ弾きは、「毎日あんなに上手にみんなの病気をなほして」いるということである。セロ弾きは毎日毎日「ごうごうがあがあ」と床にひびく音を出し、それが動物たちの治療に役立っていたわけだから、この響きは相当に大きく強いものであったと考えられる。また、あんまの代わりになっているという事は、その響きからの振動が規則的でリズミカルなものであることも必要だろう。このような音を出せるセロ弾きは、少なくとも初心者ではないだろう。また、毎日直せるのだから「下手」ではないことも確かだろう。

三つのはなしの検討から導き出されるのは、少なくとも初心者や「下手」ではない、相当の技量と実力がこのセロ弾きには備わっているということである。

音楽にたずさわるものとしての自信やプライドは、このようなセロ弾きの力量に支えられたものでもあったと考えられ

るのである。

注

（1）「セロ弾きのはなし」は、『新校本宮澤賢治全集』、ちくま文庫版『宮沢賢治全集』、『宮沢賢治コレクション』においても本文化・準本文化はされていない。

（2）この作品題名列挙メモが、「セロ弾きのはなし」の成立時期の推定に関連する。次稿で取り上げることになる。

（3）校異では、⑥番目として、「やや濃いブルーブラックインク・ペンおよび墨・毛筆」をあげている。この筆記具については、ブルーブラックインクについては、⑤の段階と判然とした区別がつけにくいこと、また墨も例外的に数カ所用いられるのみであるので、第⑤段階に含めて考えてもよいと判断した。

（4）「セロ弾きのはなし」のテクストにおいては、登場する動物の表記は、ねずみの場合「ねづみ」と「ねずみ」、猫の場合「猫」と「ねこ」、かっこうの場合「かくこう」と「かっこう」というように複数混用されている。これらについて、場面による使い分けは意識されていないようで、ねずみは「ねづみ」、猫は「猫」、そしてかっこうは「かくこう」の使用が優勢である。その後、「セロ弾きのゴーシュ」への推敲過程で、新たに書かれたテクストでは、「ねずみ」、「猫」、「かっこう」に統一的にされていっている。ただし、「セロ弾きのはなし」段階で書かれたものの修正にまでは手が回らなかったようだ。また、宮沢賢治16歳（盛岡中学4年生）の時、１９１２（大正元）年10月刊行の、『最新動物学教科書』（丘浅次郎著、六盟館刊）には、「ねずみ」、「くわくこう」と表記されており、宮沢賢治の仮名づかいは、必ずしも正確ではなかった。本稿では、「セロ弾きのゴーシュ」での使用例に合わせて、引用以外は「ねずみ」、「猫」、「かっこう」の表記を使用することにする。

（5）「青い」は、黒インクによる手入れ時の追加。三毛猫の青いトマトの運搬と呼応させるための手入れである。